

### 3-13 第 13 分科「日本の水輸入を考える」まとめ

担当 林武司

分科会テーマ	日本の水輸入を考える
担当者・メンバー	担当者:林 武司 メンバー:片岡舞子、廣田雅俊、菊池奏江、熊谷 衛
活動の概要	日本が輸入（消費）している海外の水資源量を理解するため、各自が調査した品目（牛肉、小麦、リンゴ、コメ）について、各国の <b>Water Footprint</b> （生産するのに消費した水の量）を整理・集計した。その結果を地図として可視化するとともに、日本の <b>Water Footprint</b> と比較することで、日本の海外の水資源量への依存度を調査した。
活動のプロセス	<p>はじめに、世界の水資源の需要の現状と、日本に輸入されている物資の生産に伴う水の消費量について整理した。その結果を踏まえて、本分科会のテーマを「日本は、どれくらい海外の水資源に依存しているのか」と設定した。これによって、水を介して世界の資源や社会・経済と日本の関わりを理解することを目指し、日本で作ったほうが水を節約できるものは何だろうか、ということを考えることにした。</p> <p>まず、国家間の水資源のやりとりを議論するための概念である“<b>Water Footprint</b>”について理解するため、<b>Water Footprint Network</b>が発行している <b>Water Footprint Manual</b>（英文）をメンバー全員で講読した。講読に際しては、各自が和訳・要約したものを全員で確認しあうことで、知識の共有化をはかった。</p> <p><b>Water Footprint</b> の概念や算出方法などを理解した後に、各自が関心のある輸入品目について調査することとした。作業手順としては、輸入品目に関する各国の <b>Water Footprint</b> のデータを集め、その結果を地図に表して可視化するとともに世界の <b>Water Footprint</b> を算出する、とした。</p> <p>今回の調査では、牛肉、小麦、リンゴ、コメという 4 品目について調査を行った。これらの項目にした理由は、日本に輸入されている主要な食品類である穀物、肉類、野菜・果実類について調査することで、およその全体像を把握するためである。穀物からは、自給が主であるコメと、輸入が主となっている小麦を選定した。肉類からは、消費量が急速に増加している牛肉を対象とした。野菜・果実類からは、東北地方の代表的な生産物の 1 つであるリンゴを選定した。</p> <p>各品目について検討する際には、日本への輸入の状況や国内自給率、各国の生産量、栽培に適した気候なども考慮した。</p>

まとめ	<p>今回調査した品目については、日本で作ったほうが水の節約になることが確認できた。このことから、世界規模での水資源の保全という観点からは、これらの品目については、自国での生産を進めていくべきであるといえる。ただし、自国での生産を進めるためには、関税や貿易協定、生産コスト、単収、飼料など様々な課題の解決が必要であるということがわかった。</p> <p>また、当たり前のことかもしれないが、農作物や畜産物などの生産は、それらに適した気候の土地で行うべきではないかということも、改めて確認することができた。</p> <p>今回の作業を通じて得られた結論としては、地球規模での水資源の節約を意識しながら、自国での生産量を増やすなど海外の水資源になるべく頼らないような方法を模索していかなければならない、ということである。</p>
-----	--